

医学プラザ

評価表からみる小児医療面接における OSCE 導入の効果

河島尚志 星加明德 松岡 健¹⁾
林 徹²⁾ 小柳 泰久³⁾

東京医科大学小児科

¹⁾ 内科学第5講座

²⁾ 内科学第3講座

³⁾ 外科学第3講座

目 的

平成9年度より臨床実習を終えた学生に対し、総合的評価として Objective Structured Clinical Examination (OSCE) を採用した。OSCE は医療面接、胸腹部の理学的所見、脳波判読、神経学的所見、縫合など13の station を置き、多角的に学生の評価を行った。小児科は小児の医療面接を担当し、患者本人からでなく、母親役の SP (模擬患者) から児の状態を聞き出すという形式により OSCE を行った。今回、この小児の医療面接の卒前教育としての効果を知るため、2年間の評価表の結果から解析を行った。

方 法

学生数は平成9年度105名、平成10年度109名で、評価表は評価者(評価医師)も SP も、曖昧さを無くするため、各項目で0を“悪い”, 3を“良い”とし、1, 2はその間(やや悪い, やや良い)とし、0~3までの4段階で評価を行い、0ないし1の者を poor とした。評価者の評価表は大きく、①インタビューの進め方(自己紹介をしたか、患者の氏名を確認、話を遮らない、適切な視線、要約を述べ経過を確認、解釈モデル、言い忘れの確認など7項目)

と、②インタビューで得られた情報について(症状の発現の時期、程度、随伴症状、既往歴、家族歴、発達歴)とに分けて評価した。SP の評価表は、①共感的態度を感じたか、②信頼できる態度であったか、③言いたいことが十分にえたか、④病歴を十分聞いてもらえたか、⑤専門用語を使わずわかり易い話し方をしたか、の5項目で行った。疾患は平成9年度が午前午後とも熱性痙攣、平成10年度は午前が髄膜炎(主訴は発熱)、午後が百日咳(咳)である。

結 果

評価者の評価では(図1)、インタビューの進め方は自己紹介、患者の氏名の確認、適切な視線、要約を述べ経過を確認、解釈モデル、言い忘れの確認など、ほとんどの項目で poor の割合が減ってきており、著明に成績の改善が認められた。

インタビューで得られた、あるいは問診した疾患に関する情報についての評価者の評価表による0~1の poor の者の割合を表1に示した。平成9年度では poor な者の割合は38.1%から60.0%、平成10年度は午前中の髄膜炎で53.6%から82.1%と、かえって poor な者の割合は増加していた。午後の百日咳になると、22.6%から54.7%とほぼ平成9年度と

2000年9月5日受付, 2000年10月31日受理

キーワード: objective structured clinical examination, OSCE, 医療面接, 小児, SP

(別刷請求先: 〒160-8402 東京都新宿区新宿 6-1-1 東京医科大学小児科 河島尚志)

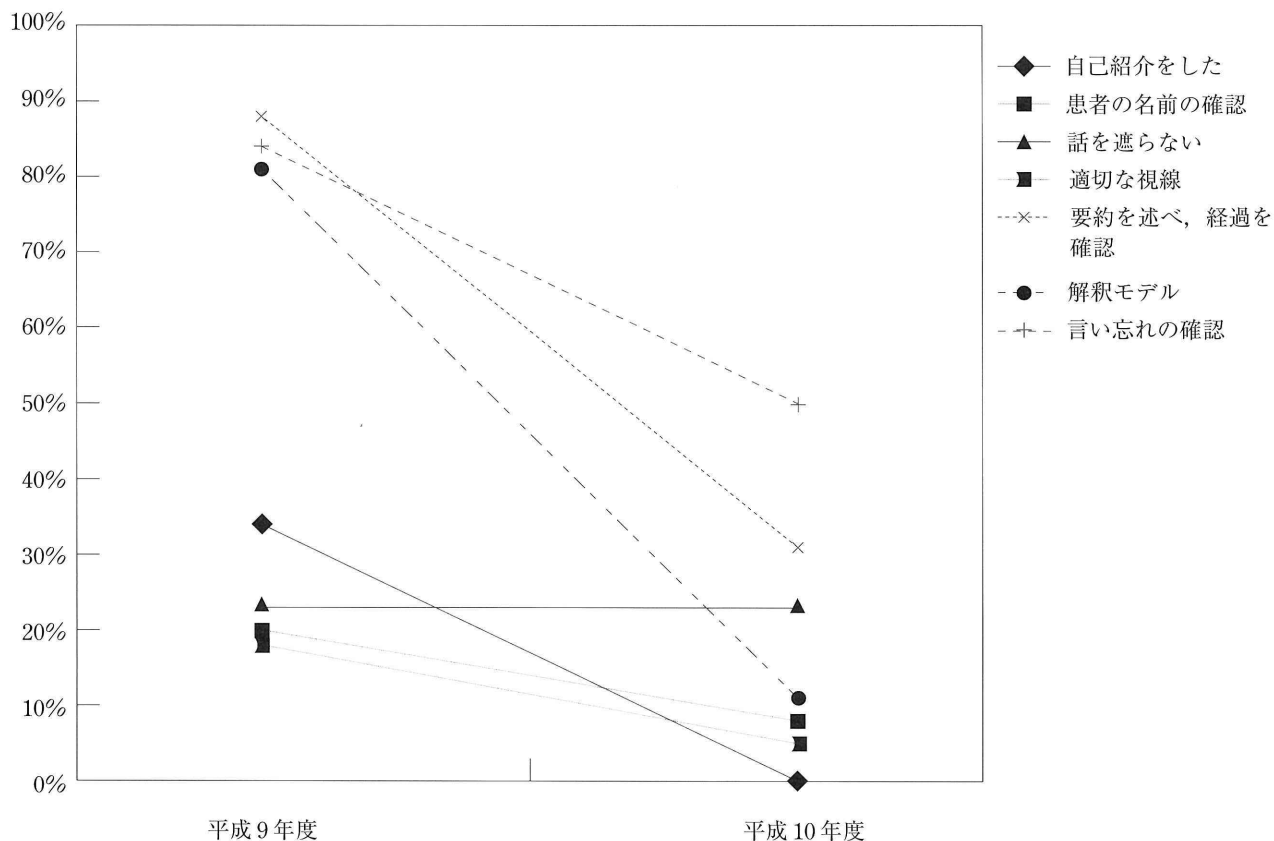


図1 評価者のインタビューの進め方に関する評価表における0または1 (poor) の学生の割合

表1 評価者のインタビューで得られた、あるいは問診した情報についての評価表の0または1 (poor) の学生の割合

疾患 (主訴)	平成9年度		平成10年度		平成10年度午後	
	熱性痙攣 (痙攣)		髄膜炎 (発熱)		百日咳 (咳)	
症状 ①	どのような時	43.8%	嘔吐	58.9%	発熱の有無	54.7%
②	持続	38.1%	頭痛	82.1%	咳の性状	22.6%
③	左右差	60.0%	咳	53.6%	流行	22.6%
④	意識障害	54.3%	下痢	55.4%	予防接種	39.6%
既往歴	9.5%		12.5%		18.9%	
発達歴, 家族歴	家族歴		発達歴		家族歴	
	81.0%		30.4%		43.4%	

同じ割合となっていた。既往歴に関しては poor の割合が増加し、発達歴、家族歴に関しては poor の割合が減ってきていたが、十分に問診がとれない poor の率は依然高率であった。

SPの5項目の評価(図2)において、平成9年度は共感的態度や十分言いたいことがいえたか、病歴を十分聞いてもらえたかなど、7から13%に poor

の者を認めたが、平成10年度では病歴に関するものの以外、すべてにおいて poor は3%以下になっていた。病歴に関しての poor の割合が下がらないのは、疾患モデルが整理されていないためと考えられた。

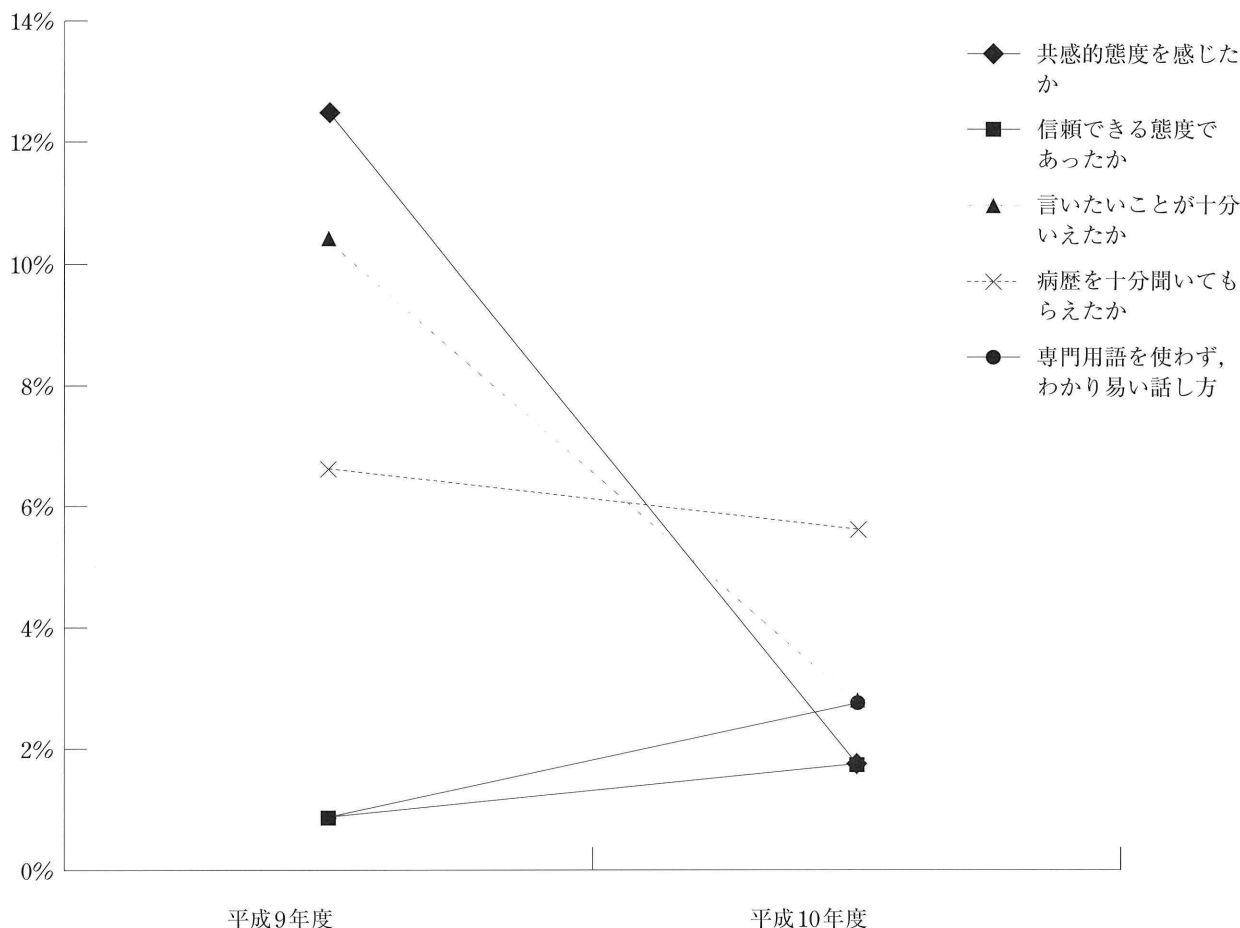


図 2

考 察

OSCE すなわち客観的臨床能力試験はHardenらにより提唱された医師の能力試験であり¹⁾、すでに米国や北米において採用され、本邦においても平成15年度より医師国家試験に導入が検討されている。その客観性は伴らによると筆記試験を中心とした知識を試す試験に比べ、より臨床能力を的確に評価でき、身体診察技能の向上につながる事が知られている^{2,3)}。小児科における医療面接は内科と異なり、患者本人からの問診でなく、母親という媒介を通しての問診が一般的である。このため closed question が多くなる傾向にあること、また成長と発達を伴う患者であるため、問診に関して小児全般の成長を念頭においての問診が必要となる。このため、より注意深い面接能力が必要とされる⁴⁾。本邦では、現在まで小児科領域における医療面接を検討した報告はない。今回、評価表を用い OSCE における小児医療面接の効果を検討した。疾患が異なるため一概に

比較検討は難しいが、評価者の評価もインタビューの仕方の項目で、poor の者の割合が減っていた。また、SP による評価も OSCE 導入の1年間で、共感的態度や信頼できる態度、専門用語を使わずわかり易いなど、すべての項目で poor の評価が減っていた。平成9年度以降 OSCE が総括的評価として本大学で定着しており、教官の臨床実習での指導や学生の医療面接の練習など学習効果によるものと考えられ、医療面接が面接方法の習熟の点で、学生の底上げに非常に有効と考えられた。

一方、問診した内容についての評価者の評価では、poor の者に関しては1年間で点数の底上げは無く、疾患モデルを把握できておらず、診断に必要な問診が洩れることが多かった。これは、小児疾患に対する全般的知識の欠如が原因と推察された。また、疾患により、かなり poor な割合が変わるということは、小児科の医学的知識がこういった一般的な主訴の病気に関して整理されてないことの現われと考えられた。これらの結果から、系統講義後の臨床実習

における教育法に横断的知識の整理を取り入れる必要があると考えられた。

結 論

1. 評価表を用い OSCE における小児医療面接の効果を検討した。

2. 問診した内容についての評価者の評価では poor な者に関しては、1年間で点数の底上げは無かった。これは疾患モデルを把握できておらず、小児疾患に全般的知識の欠如が原因と推察された。

3. SP による評価は OSCI 導入の1年間で、共感的態度や信頼できる態度、専門用語を使わずわかり易いなど、すべての項目で poor の者が減っていた。また、評価者の評価もインタビューの仕方の項目で、poor の者が減っていた。このことは学生の医療面

接の練習など学習効果によるものと考えられ、医療面接が面接方法の習熟の点で、学生の底上げに有効と考えられた。

参 考

- 1) Harden RM, Stevenson M, Downie WW and Wilson GM: Assessment of clinical competence using objective structured examination. *Br Med J* **1**: 447~451, 1975
- 2) 伴信太郎: 客観的臨床能力試験-臨床能力の新しい評価法. *医学教育* **26**: 157~163, 1995
- 3) 伴信太郎, 津田司, 田坂佳千他: OSCE による「臨床入門」実習の評価. *医学教育* **25**: 221~229, 1994
- 4) Joorabchi B: Objective structured clinical examination in a pediatric residency program. *Am J Dis Child* **145**: 757~762, 1991

Effects of OSCE on peadiatric eliciting history by score sheets

Hisashi KAWASHIMA, Akinori HOSHIKA, Ken MATUOKA¹⁾, Tohru HAYASHI²⁾, Yasuhisa KOYANAGI³⁾

Department of Peadiatrics, the Fifth Department of Internal Medicine¹⁾, the Third Department of Internal Medicine²⁾, the Third Department of Surgery³⁾, Tokyo Medical University

Abstract

We investigated the effectiveness of OSCE in pediatric eliciting history by using the socre sheet. Accordingly we could see an improvement in interviewing the parents (SP) of the patients. However, there was no real improvement concerning the ability of diagnosis which was shown in the score sheet. This clearly shows a lack of general knowledge in the pediatric field. However, the OSCE is effective for the evaluation and improvement of the students.

〈Key words〉 objective structured clinical examination, OSCE, 医療面接, 小児, SP
